

研修会のお知らせ
30ページ参照

平成12年6月8日 第三種郵便物認可（毎月1日発行） 平成26年12月1日発行

2014.12
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみ やく 富 薬

12号

第36巻
No.305



オケラ *Atractylodes japonica* Kitam. (キク科 *Compositae*)

生薬 ワビヤクジュツ（和白朮）晩秋に掘上げ、茎を切り取り、水洗後細根を除き、そのまま又は周皮を除いて2～3日陽干する。更に風通しの良い棚に並べ、陰干しする。

成分 セスキテルペノイド:attractylon, 3 β -hydroxyattractylon, 3 β -acetoxyattractylon, attractylenoide I, II, III、ポリアセチレン化合物:diacetyl-atractylodiol、その他:attractanA, B, C

効能 芳香健胃薬として胃のつかえ、腹満、腹痛、下痢に用いる。健胃消化、止瀉整腸、利尿、鎮うん、保険強壯、鎮痛薬とみなされる漢方処方に配合される。



生薬 オケラ

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



日当たりのよい丘陵地を好むオケラは、日本各地に自生しています。長野の里歌で「山でうまいものはウケラにトトキ（ツリガネニンジン *Adenophora triphylla*）、里でうまいものはウリとナスビ、嫁に食わずも惜しゅうござる」と歌われているように、山菜としても重宝されていました。また、古くは万葉集（7世紀後半～8世紀後半）第14巻、東歌に4首が詠まれています。

恋しければ袖も振らむを武蔵野のうけらが花の色に出なゆめ

（恋に苦しくなったら袖を振ろうものを、武蔵野のうけらの花のように、人目に立つそぶりをなさるな）

うけらは万葉仮名で「宇家良」と書かれますが、その由来ははっきりしません。うけらが訛ってオケラになったと言われています。うけらは秋に茎の先端に白色または淡紅色の花を多数咲かせますが、歌の中では目立たない花として詠み込まれています。

京都祇園の八坂神社の神事「おけら詣」は元旦の寅の刻（午前四時）に桧材を摩擦して起こした火を削掛けに移し、オケラを加えて焼き、その火で新年の供物を調える神事です。最近は大晦日に火縄に火を受け持ち帰り、雑煮をこしらえる習わしになっています。また、薬祖神、大己貴命（大国主命）と少彦奈命を祀る東京上野の五条天神社では節分の日に「うけら餅」を焚いた火で焼いた餅を食べると一年間無病健康に過ごせるという「うけら餅」の神事が行われ、現在でも生活に密着した神事として親しまれています。これらは水と火への信仰として水を逐い、湿気を払うオケラを用いたと伝えられています。

お正月に一年の邪気を払い、長寿を願って「屠蘇散」を飲む風習もあります。基原は三国時代（222-280）に名医華佗による処方とも言われ、蘇は病をもたらず鬼を屠る、邪を屠り身体を蘇る等諸説があり、正月の縁起物として飲まれるようになったのは唐の時代からと言われています。日本に伝わったのは弘仁年間（9世紀平安時代前期）で、江戸時代には庶民の文化として浸透しました。『本草綱目』（1590）には「赤朮・桂心・防風・抜契・大黃・烏頭・赤小豆」と処方が記されています。オケラは元々梅雨の時期にお寺の納戸や土蔵、戸棚の中で焚かれ、除湿効果や防霉効果、防虫効果があるとされていました。後の『大和本草』（1709）にも「きさんて焼けは邪気と悪臭を去り疫病を除く常にたくべし為罌末糊に和し引のべて大線香とし陰乾し貯へし」とあり、これらの効果が不思議な魔力と映り、邪気を払う儀式に取り入れられたのではないかと推測されています。

『日本書紀』（720）の天武、十四年「冬十月癸酉朔丙子、百濟僧常輝封卅戸、是僧壽百歳。庚辰、遣百濟僧法藏・優婆塞益田直金鐘於美濃、令煎白朮、因以賜絶綿布。……十一月癸卯朔……丙虎、法藏法師・金鐘、獻白朮煎。是日、爲天皇招魂之。」とあり、美濃で白朮を採取し、天武天皇に煎じて飲ませた処、病が平癒したことが記されています。平安時代の『延喜式』（927）の典薬寮に飛驒國と備前國の40斤を最大に、越中國は11斤など34ヶ国から約602斤（134kg推定値）が献納された記録があります。万葉集に詠まれた武蔵國の献納が記されていないのは意外です。（村上守一 記）